

<論文>

小泉文夫の音階の基礎構造による山口のわらべ歌の 分析と分類から見る初期音楽教育

徳 留 勝 敏

東亜大学人間科学部心理臨床子ども学科
tokudome@toua-u.ac.jp

《要 旨》

戦後の教育が始まって以来今日まで、わらべ歌研究は、教育的な視点で多くの研究が盛んに行われている。その潮流の中、発行されたのが「日本わらべ歌全集全 27 巻 39 冊」である。日本わらべ歌全集は、全国各地のわらべ歌研究者約 50 余名の協力を結集して、主として明治時代から昭和前期までの伝承わらべ歌について、北海道から沖縄まで都道府県別に歌詞・曲譜を克明に記録し、民族伝承や遊び方について解説を付したものである。(内田, 河北「山口のわらべ歌 日本わらべ歌 19 下」 1992a p2), そして 1992 年 11 月 25 日内田伸, 河北邦子共著「山口のわらべ歌 日本わらべ歌 19 下」が発行された。

わらべ歌の研究に大きなうねりを起こしたのが、小泉文夫の研究成果を示した各著書である。中でも 1958 年に出版された「日本伝統音楽の研究」(音楽之友社)は、日本の民謡とわらべ歌の音階基礎構造を明らかにした。その結果、わらべ歌を音階の種類別に分析し分類を行うことが可能となった。そしてそこには、自然発生的な法則があり厳密に守られていることを発見することとなる。⁽¹⁾ さらに小泉文夫の著書「おたまじゃくし無用論」では西洋音楽一辺倒の日本の音楽教育の問題を指摘し、日本の伝統音楽であるわらべうたを初期音楽教育に用いる重要性を提言した。その結果、現場教師の伝統音楽への傾倒姿勢やわらべ歌の音楽教育への問題を強めることになった。(西谷紀久子「小泉文夫の音楽理論から学ぶもの わらべうたから始める音楽教育に着目して」東北女子大学・東北女子短期大学 紀要 2017a p209)

本研究は小泉文夫による日本の伝統音楽の音階の基礎構造の理論に従って、山口のわらべ歌を分析及び分類を行った。その結果から付帯要素を持つわらべ歌を重視した小泉文夫の教育論の根拠を検証し、わらべ歌が幼児期における初期音楽教育に最も重要であることを考察する。

キーワード：小泉文夫、わらべ歌、2 音旋律、3 音旋律、4 音旋律、呂旋法、律旋法、
テトラコルド、ペンタコルド、園部三郎

《目次》

1. 小泉文夫の業績
2. 小泉文夫の音階の基本構造
 - 2.1 小泉文夫の音階の分析方法
 - 2.2 核音について
 - 2.3 テトラコルドの分割
 - 2.4 テトラコルドの積み重ね
3. 山口のわらべ歌の資料とわらべ歌の歴史的背景
4. 小泉文夫の音階の基礎構造による分析と分類
 - 4.1 小泉文夫の音階の基礎構造による山口のわらべ歌の分析
 - 4.2 小泉文夫の音階の基礎構造による山口のわらべ歌の分析の統計からみる特徴
5. 小泉文夫の教育論
 - 5.1 江戸時代から戦後の音楽教育の推移の概要
 - 5.2 わらべ歌を出発点とする音楽教育
 - 5.3 わらべ歌の教育方法
 - 5.4 小泉文夫の西洋音楽一辺倒の教育批判
6. おわりに

1. 小泉文夫の業績

小泉文夫は1927年4月4日東京生、音楽学者である。日本、アジア、中近東をはじめ世界各地の民俗音楽を研究し、数々の業績を残している。東京大学同大学院で主として日本音楽理論を研究する。音組織・音階論の視点から書かれた初期の論文は著書「日本伝統音楽の研究」にまとめられた。小泉の文化全般にわたる幅広い研究は、文化人類学関係者たちにも影響を与えた。⁽²⁾ また、日本音楽のリズム・メロディー・テクスチャー・音色それらと言語・風土・生活・社会規範等、多岐にわたって分析・比較した研究は、当然日本の音楽教育研究問題にまで及んだ。(西谷紀久子「小泉文夫の音楽理論から学ぶもの わらべうたから始める音楽教育に着目して」東北女子大学・東北女子短期大学 紀要 2017a p208)

小泉文夫の代表的研究成果「日本伝統音楽の研究」(1958)は、日本の民謡とわらべ歌を研究対象としてその音階構造を明らかにした。小泉は、わらべ歌をはじめとする民俗音楽は、日本音楽の基層文化、すなわち邦楽の諸ジャンルの共通の基礎にある日本人の基本的音感を体現するものと捉えた。その研究方法は比較音楽学の方法である。音楽の研究を歌詞の文学的内容で置き換える従来の内容主義を避けて、ヨーロッパの音楽理論の立場において、音組織の客観的な認識を目指した。そして、小泉が明らかにした音階構造が日本の音楽にどの程度妥当するかという観点から議論が積み重ねられ、発展的に継承されている。(福岡正太「小泉文夫の日本伝統音楽研究：民俗音楽研究の出発点として」国立民族学博物館研究報告 2003a p257 p258 P260)

2. 小泉文夫の音階の基本構造

2.1 小泉文夫の音階の分析方法

小泉文夫の用いた音階の分析方法は、中国やヨーロッパの音楽理論を参考にすることはせず、実際の音楽から観察される音の動きや働きから法則を導き出した。ここで採譜に関して問題があっ

た。日本の旋律は、ヨーロッパや中国にくらべて一般にメリスマ的^(注1)である。そして各音が微妙に上下していることも少なくない。したがって旋律構造や音域を規定し音階を決定するためには、単に忠実に採譜された五線譜だけでは十分ではない。旋律中の細部も明確に決定しているヨーロッパの芸術音楽の記譜法は、日本音楽の表現には適さないが、柔軟な音と安定した音を区別することを有効な記譜法として採譜を行った。そして、各種類のわらべ歌を構成している音の種類の数、2音旋律、3音旋律、4音旋律とテトラコルドと呼ばれる完全4度の音域を構成する核音の使われ方によって、音階での基礎構造を示した。⁽³⁾

2音旋律 (2種類の音で構成)⁽⁴⁾

- (1) 長2度の音程を持つ2つの音のみで構成されている旋律。
終止音は常に2つの音の上の音となる。
長2度の関係を持つ2音旋律がほとんどである。



図1 長2度の関係を持つ2音旋律

- (2) 短3度の音程を持つ2つの音のみで構成される旋律。
終止音は下の音に終始する。

3音旋律 (3種類の音で構成)⁽⁵⁾

- (第1種) 長2度+長2度の関係を持つ3音で構成された旋律。
終止音は真ん中の音。(1つの終止音を持つ)

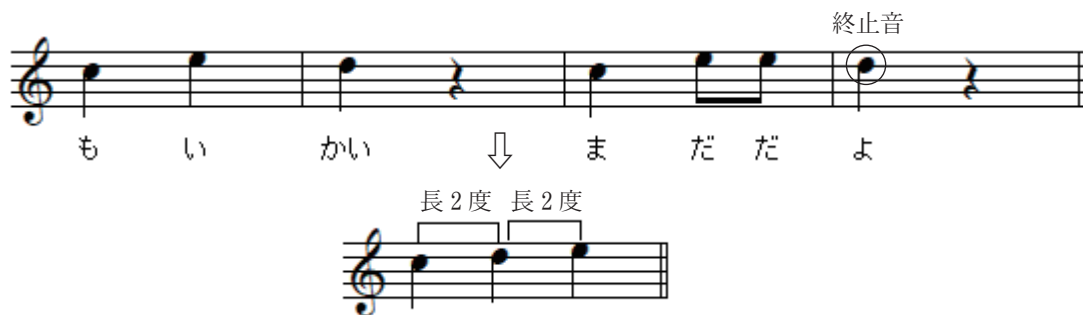


図2 長2度+長2度の関係を持つ3音旋律

- (第2種) 短3度+長2度の関係を持つ3音で構成された旋律。
終止音は長2度で終わるとき上の音、短3度で終わるときは下の音。
(2つの終止音を持つ)



図3 短3度+長2度の関係を持つ3音旋律

(第3種) 長2度+短3度の関係を持つ3音で構成された旋律。
終止音は下の音。(1つの終止音を持つ)

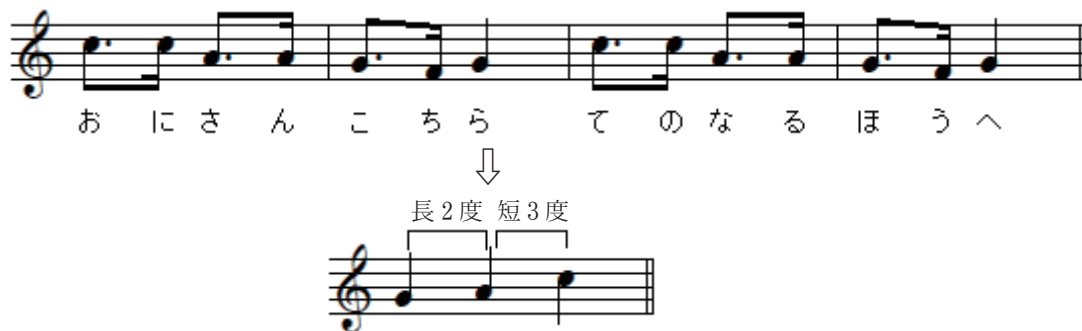


図4 短3度+長2度の関係を持つ3音旋律

4音旋律 (4種類の音で構成)⁽⁶⁾

(第1種) 長2度+長2度+短3度の関係を持つ4音で構成された旋律。
終止音は下から2番目の音。(1つの終止音を持つ)



図5 長2度+長2度+短3度の関係を持つ4音旋律

(第2種) 長2度+短3度+長2度の関係を持つ4音で構成された旋律。
終止音は上の音と下から2番目の音。(2つの終止音を持つ)

かくれんぼするもの よっといで このゆびとまれ

長2度 短3度 長2度

図6 長2度+短3度+長2度の関係を持つ4音旋律

(第3種) 短3度+長2度+長2度の関係を持つ4音で構成された旋律。
終止音は下の音と上から2番目の音。(2つの終止音を持つ)

かごめ かごめ かごのなかの とりは じっくり でやる

短3度 長2度 長2度

図7 短3度+長2度+長2度の関係を持つ4音旋律

(第4種) 短3度+長2度+短3度の関係を持つ4音で構成された旋律。
終止音は上から2番目(1つの終止音を持つ) 実例としては少ない。

てん まり つく な まり つく な

短3度 長2度 短3度

図8 短3度+長2度+短3度の関係を持つ4音旋律

小泉は、2音で構成される音階を1種類、3音で構成される音階を3種類、4音で構成される音階を4種類と音階の構造を示した。

2.2 核音について

わらべ歌の旋律中の終止音は、楽句によっては終止の性質を持たなくなる音も出てくる。同じ楽句を連続して繰り返して終える場合など、必ずしも終止音で終わっているとは限らない場合もある。しかし終止の性質を持たなくなっても終止音の周辺の音は、終止音に従属する性質となり簡単には跳躍進行の音程をとらず終止音に支配されている。このため小泉文夫は、必ずしも終止音で終わらず旋律の中核的な役割を持つようになった終止音を、核音と呼んでいる。この核音の機能は日本の伝統音楽すべてに作用しているため、基本的な音楽形成の要素として日本の伝統音楽の側面を捉えることができる。そして小泉文夫は、核音が1音しか現れない旋律と複数の核音が現れる旋律の核音同士の音程の関係の違いを6種類の型として示した。核音同士の音域の区別であり、旋律の音域とは無関係である。⁽⁷⁾

小泉文夫は核音の定義を4度構造のテトラコルドを単位として旋律を分析する場合の「枠になる重要な音」としてこの核音がオクターブ内に2～3個現れることもある。中心音の概念も含む。(小泉文夫「日本伝統音楽の研究」音楽の友社 1960 p118)

(エンゲ・メロディー型)

エンゲ・メロディーは狭い音域の旋律の意味を持つが単に狭い音域の意味ではなく、1つの核音しか持たない旋法型である。2音旋律、3音旋律の第1種と第3種、4音旋律の第1種と第4種がこれにあたる。

(テトラコルド型)

テトラコルドは、ギリシアの4度音階から借用した名称である。旋律の音域とは関係なく、2つの核音同士の音程が4度である型がテトラコルド型である。

(ペンタコルド型)

旋律の音域とは関係なく、2つの核音同士の音程が5度である型がペンタコルド型である。

(プラガル旋法型)

プラガルとは、キリスト教旋法の変終止（アーメン終止）のことである。高い音程からペンタコルド型その下にテトラコルド型が重なった型である。ペンタコルド型の下核音とテトラコルド型の上核音は同じ音であり、ペンタコルド型の上核音とテトラコルド型の下各音はオクターブの関係となるのがプラガル旋法型である。

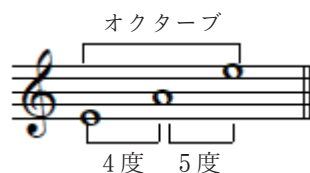


図9 プラガル旋法型の核音の位置

(正格旋法型)

正格旋法はキリスト教教会旋法から借用した名称で、高い音からテトラコルド型とその下にペンタコルド型と重なった型である。

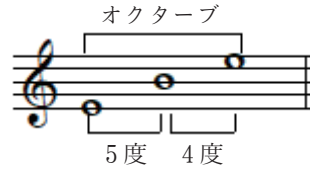


図10 正格旋法型の核音の位置

(広域型)

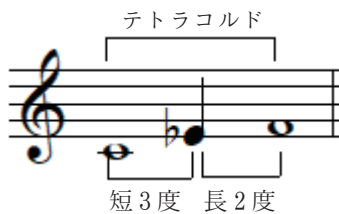
核音が4つ以上含まれる型で中心にテトラコルドを置きその上下の音域にペンタコルドを置くタイプと中心にペンタコルドテトラコルドを置きその上下のテトラコルド音域にペンタコルドを置くタイプがありいずれも1オクターブを超えた音域となる。

この核音の関係で導いた6種類の型を小泉文夫は、わらべ歌について、エンゲ・メロディー型が約3割、ペンタコルド型が約1割、プラガル型と正格旋法型を合わせて約1割、残りの約5割がテトラコルド型でわらべ歌の半数がテトラコルド型としている。そして核音を1つ含むエンゲ・メロディー型は、テトラコルド型に至る前段階と判断していることからわらべ歌の音階の基礎構造はテトラコルド型が中心となっている。⁽⁸⁾

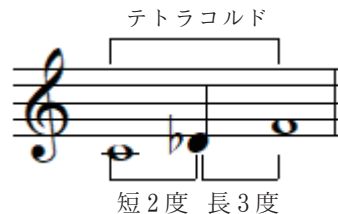
2.3 テトラコルドの分割

わらべ歌はテトラコルド型を中心に成立している。分割する方法として2音旋律と3音旋律の核音が解っているので、テトラコルドを形成する4度の音程を2度と3度の核音を考慮して中間音を割り出し、4種類のテトラコルドを導いた。⁽⁹⁾

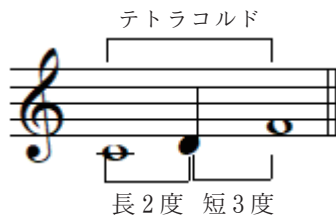
第1種 テトラコルド
民謡（田舎節）のテトラコルド



第2種 テトラコルド
都節のテトラコルド



第3種 テトラコルド
律のテトラコルド



第4種 テトラコルド
琉球のテトラコルド

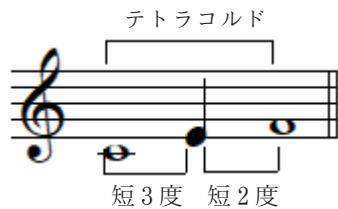


図11 4種類のテトラコルド

第1種テトラコルドは、民謡音階に見られる。民謡（田舎節）テトラコルドとも呼ぶ。^(注2)

第2種テトラコルドは、都節音階に見られる。都節テトラコルドとも呼ぶ。^(注3)

第3種テトラコルドは、雅楽に見られる。律のテトラコルドとも呼ぶ。^(注4)

第4種テトラコルドは琉球の民謡に見られる。^(注5)

2.4 テトラコルドの積み重ね

わらべ歌の音域は殆ど1オクターブより狭い音域に収まる。しかし数は少ないが1オクターブの音域を持つわらべ歌も存在する。日本の伝統音楽は、テトラコルドの積み重ねで1オクターブを導き出している。その積み重ねの方法として conjunct と disjunct の2つの方法がある。conjunct の連結方法はテトラコルドを積み重ねる時、下のテトラコルドの上の核音と上のテトラコルドの下の核音を直接重ね同じ音とする方法である。この時積み重ねると核音は3つになり7度の音程を形成することで不安定になるが転調したようなように聞こえる。disjunct は2つのテトラコルドを長2度の間隔で積み重ねオクターブを導き出し安定した旋律を作り出す。⁽¹⁰⁾ この考え方は、古代ギリシアの哲学者アリストクセノスが示した大完全音階と同じである。⁽¹¹⁾

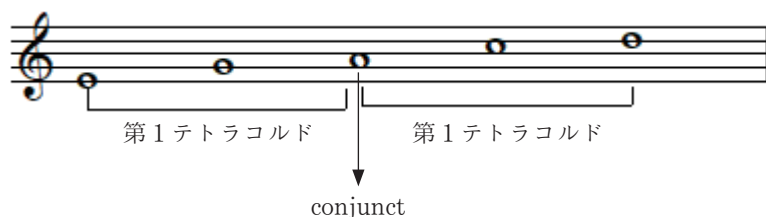


図12 conjunctによるテトラコルドの連結

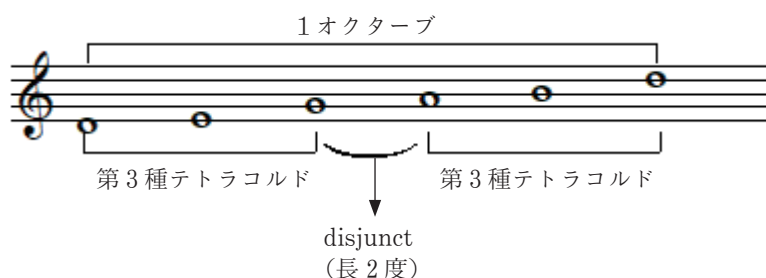


図13 disjunctによるテトラコルドの連結

テトラコルドを disjunct の連結方法によって安定した音列を作り1オクターブを導いた時、1オクターブの中にある2つのテトラコルドの核音は、オクターブの協和する響きの影響で核音としての性質が弱くなる。第3種テトラコルドを disjunct の連結方法で連結すると中の音程に長2度+長2度の3音旋律の形が現れ、終止音は真ん中の音である。その結果、核音は両端の音と下の核音から5度上の音となる。これを正格旋法型と呼ぶ。⁽¹⁰⁾

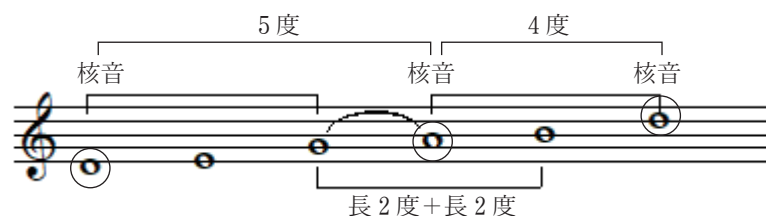


図14 正格旋法型

第1種テトラコルドを disjunct の連結方法によって音列を作るとやはり中の音程に長2度+長2度の3音旋律の形が現れ、終止音は真ん中の音である。その結果、核音は両端の音と下の核音から4度上の音となる。これをプラガリ旋法型と呼ぶ。⁽¹⁰⁾ プラガリ旋法型は、わらべ歌によく見られる。

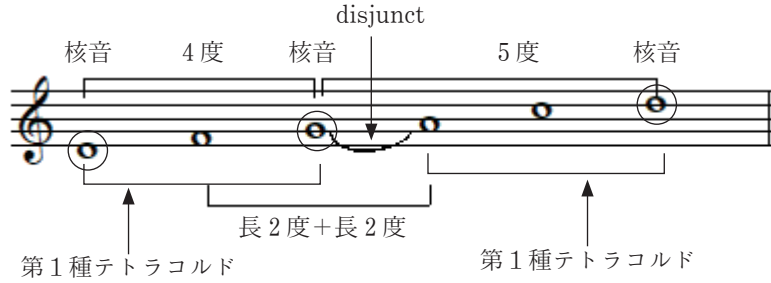


図15 プラガリ旋法型

このテトラコルドの disjunct の連結で民謡音階、都節音階、律の音階、琉球の音階も導き出すことができる。民謡音階は第1種テトラコルドの積み重ねである。都節音階は第2種テトラコルドの積み重ねである。律の音階は第3種テトラコルドの積み重ねである。琉球の音階は第4種テトラコルドの積み重ねである。⁽¹²⁾

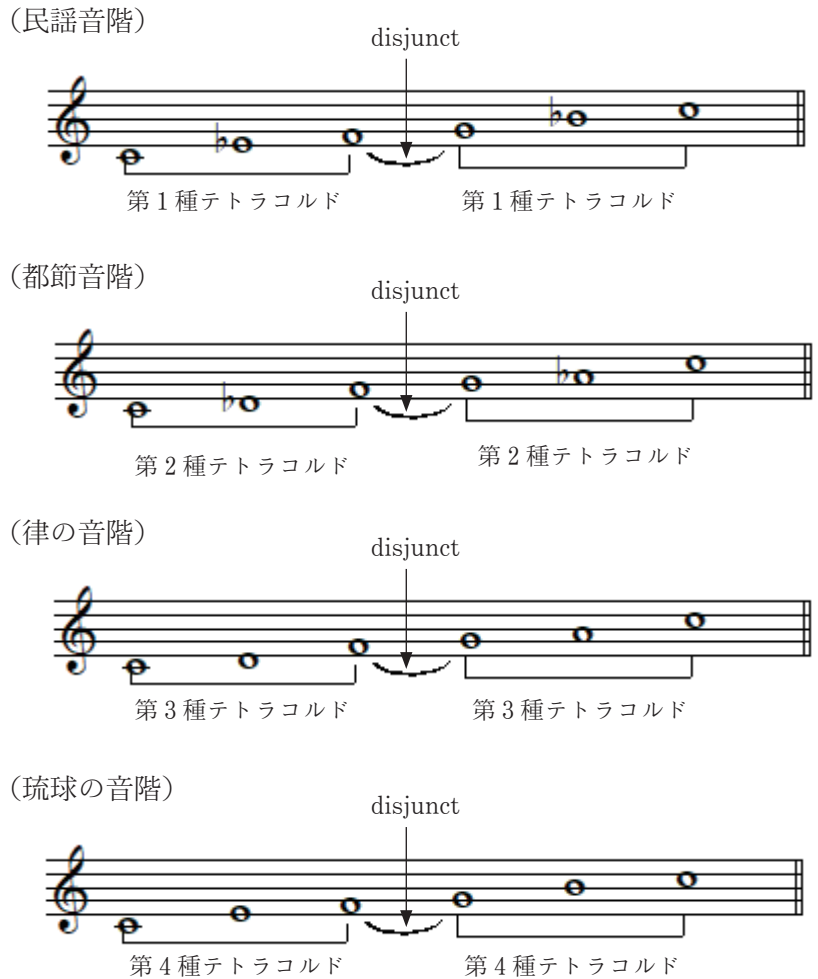


図16 日本の音階のテトラコルドによる構成

3. 山口のわらべ歌の資料とわらべ歌の歴史的背景

平成4年に「日本わらべ歌全集 19 下 山口のわらべ歌」内田伸 河北邦子 共著が出版され、この著書を本研究の山口のわらべ歌の資料とした。この著書は1遊び始め、2手まり歌、3羽根つき歌、4手遊び歌、5鬼遊び歌、6縄跳び歌、7外遊び歌、8自然の歌、9動物植物の歌、10歳事歌、11ことば遊び歌、12子守唄と遊戯唄を細分化した12の項目に分類されている。

わらべ歌は、民間伝承による音楽の総称である民俗音楽に属する。民俗音楽には他に民謡、民俗芸能の音楽がある。そして、職業音楽家に寄らない音楽である。創作者は問題ではなく集団で伝承される音楽で記録はされない。と言う共通した特徴がある。民俗音楽の歴史は古く、太鼓を手にして踊る3～4世紀のものとも推測される埴輪が出土していることからわかる。諸国の風土記には、歌垣（うたがき）^(注7)と呼ばれる行事で歌や舞が挙げられていた。また700年初め古事記と日本書紀には童謡（わざうた）^(注8)と呼ばれる古い歌が収められている。万葉集には4～8世紀半ばに詠まれた歌の中に洗濯、米つき、粉ひきなど日常生活に関する歌が含まれている。⁽¹³⁾

日本の音楽史の姿は、発展的なヨーロッパの音楽史の姿と異なり、社会の歴史が変化すると新たな音楽の分野が登場するという動きの繰り返しである。つまり新しい時代と共に新しい音楽の分野が登場する歴史である。飛鳥朝以前は固有の音楽時代、飛鳥朝から奈良朝を経て平安朝前期までは大陸からの音楽の輸入時代、平安朝から鎌倉時代を経て室町時代は能楽を代表するような民俗音楽の時代、安土桃山（織豊）時代から江戸時代いわゆる近世邦楽時代と区分が可能で、それぞれの時代でそれぞれの音楽分野が成立した。このような日本音楽の歴史の変容の中、各時代の音楽の成立以前より民俗音楽が起り、わらべ歌は子供たちの伝承を中心に成立した。⁽¹⁴⁾ わらべ歌は、古くからの伝承していった結果、時代と共に登場する新たな音楽の影響を受けることは殆どなく現代まで伝えられている。そして、民俗音楽であるわらべ歌は、日本の芸術音楽である雅楽や能楽のように規範形式や典型を持たない。そして、伝わり方は浮動的である。その浮動性も2つの方向が見て取れる。民俗学で「伝承」と言われていることで、狭義的に「伝承」と「伝播」に分けられる。「伝承」は、わらべ歌を取り囲む郷土性の変化は影響されずに同一部落、同一職業などの中で歴史的に受け継がれる。「伝播」は郷土的異なる地域にも伝わり、異質な要素も混合して新しい性格を持つ伝わり方である。縦の伝わり方が伝承であり、横の伝わり方が伝播である。そして、伝播は豊富な資料を伴う。伝承の強さ弱さの問題で忘れ去られたわらべ歌も多く、現在歌われているわらべ歌の多くは江戸時代に歌われていたものが多い。⁽¹⁵⁾

朝鮮半島に近い山口の歴史は、古くから日本の政治や外交の第一線的な地であった。663年の白村江の戦いの敗戦後、長門の国には防衛のため城が築かれた。その後奈良時代から平安時代にかけては銭貨の鑄造の役所が鑄銭司に置かれ日本の中枢を担っていた歴史がある。そして仏教、文化、文字なども山口を経て都に持たされていた。

室町時代から大内氏の支配となり文化豊かな国となった。猿楽や雪舟の墨絵などの招へいは大内氏によるものであった。そして近畿地方の方言を使って演じていた狂言が山口で演じられ、いわゆる「山口ことば」が育っていった。このような山口文化の中で山口のわらべ歌が歌われていたが山口文化の影響を受けていたかは分からない。現在山口で歌われているわらべ歌の起源は全く解っていない。⁽¹⁶⁾ わらべ歌と他の日本音楽文化との接触は、時代と共に新しい分野のできる日本音楽の特徴と伝承を基とするわらべ歌とは、音楽理論の違いからも接点は低い。山口のわらべ歌に限らずわらべ歌の起源について日本音楽との接点で解明することは困難と考える。

4. 小泉文夫の音階の基礎構造による分析と分類

4.1 小泉文夫の音階の基礎構造による山口のわらべ歌の分析

「山口のわらべ歌 日本わらべ歌 19 下」は、1 遊び始め、2 手まり歌、3 羽根つき歌、4 手遊び歌、5 鬼遊び歌、6 縄跳び歌、7 外遊び歌、8 自然の歌、9 動物植物の歌、10 歳事歌、11 ことば遊び歌、12 子守唄と遊戯唄を細分化した 12 の項目に分類されている。その 12 の項目から 1 曲ずつ取り出し分析を以下に行った。そして同様に「山口のわらべ歌 日本わらべ歌 19 下」に採譜されているわらべ歌を 12 分類別にすべて分析した結果を表にまとめた。

1. 遊び歌

お寺の坊さんが

長門市板持
採譜 安藤寿和子

下記は、わらべ歌「お坊さんが」の構成されている音である。

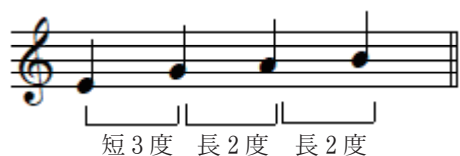
4 音旋律の形である。終止音は d 音と g 音である。

2. 手まり歌

1つひよどりゃ

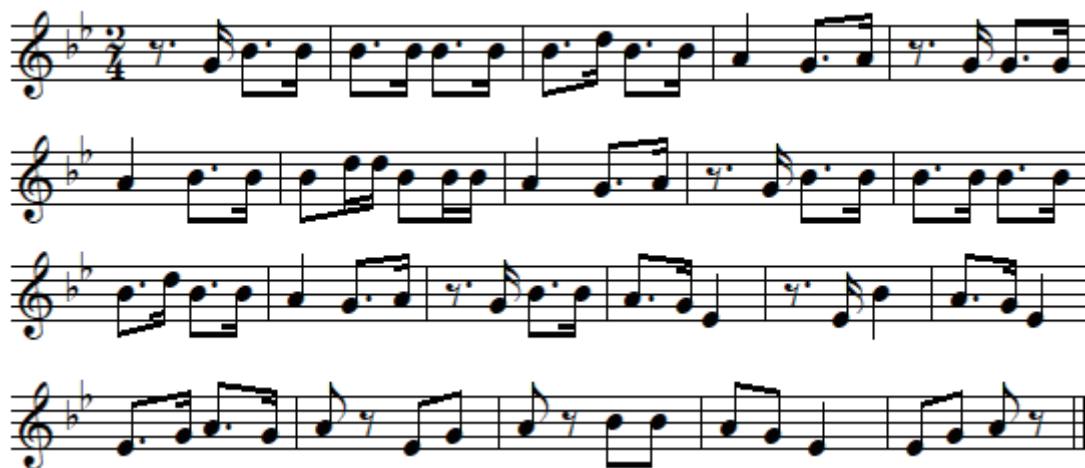
山口市
採譜 河北 邦子

下記は、わらべ歌「1つひよどりゃ」の構成されている音である。




4音旋律の形である。終止音はa音
短3度 長2度 長2度

3. 羽根つき歌 お手玉歌 どこではやるか 下関市蓋井島
採譜 河北邦子




disjunct
構成している音から都節音階である。
第2種テトラコルド 第2種テトラコルド

4. 手遊び歌 眉毛の殿様が 長門市大河内
採譜 久保宜雄

3音旋律であり第1種テトラコルドである。
終止音はa音とe音である。
短3度 長2度
第1種テトラコルド
(民謡テトラコルド)

5. 鬼遊び

かごめかごめ (一)

山口市
採譜 河北邦子



下記は、わらべ歌「かごめかごめ (一)」の構成されている音である。



4音旋律の形である。終止音はa音とe音である。

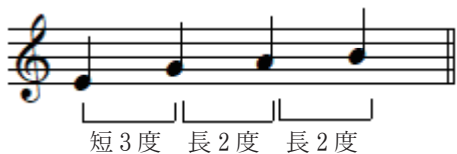
6. 縄跳び歌

おじょうさん (一)

柳井市余田
採譜 川嶋隆志



下記は、わらべ歌「おじょうさん (一)」の構成されている音である。



4音旋律の形である。終止音はa音

7. 外遊び歌

ひらいたひらいた

山口市

採譜 河北邦子



下記は、わらべ歌「ひらいたひらいた」の構成されている音である。



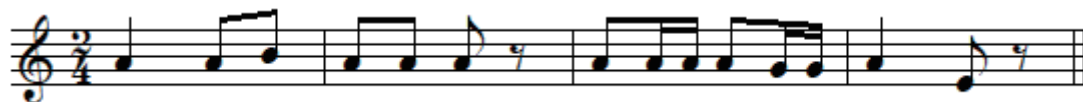
3音旋律であり第1種テトラコルドである。
終止音はa音とe音である。
第1種テトラコルド(民謡テトラコルド)

8. 自然の歌

夕やけ こやけ

山口市

採譜 河北邦子



下記は、わらべ歌「夕やけ こやけ」の構成されている音である。



3音旋律であり第1種テトラコルドである。
終止音はa音とe音である。

9. 動物 植物の歌

ほうほうほたる来い(三)

山口市

採譜 河北邦子



下記は、わらべ歌「ほうほうほたる来い(三)」の構成されている音である。



4音旋律の形である。終止音はa音とe音である。

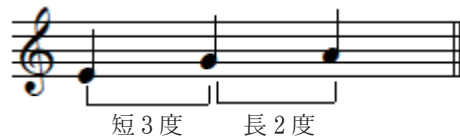
10. 歳事歌

どんどん焼きゃ

山口市
採譜 河北邦子



下記は、わらべ歌「どんどん焼きゃ」の構成されている音である。



3音旋律であり第1種テトラコルドである。
終止音はe音である。
第1種テトラコルド（民謡テトラコルド）

11. ことば遊び歌

みかん きんかん

山口市
採譜 河北邦子



g音とa音の長2度関係の2音旋律で終止音はa音である。

12. 子守唄

ねんねこよ

山口市
採譜 河北邦子



下記は、わらべ歌「ねんねこよ」の構成されている音である。



4音旋律の形である。終止音はd音とg音である。

表 1 日本わらべ歌全集 19 下 山口のわらべ歌の分析

分類	No	曲名	旋律の種類	核音・ 終止音
遊びのはじめ	1	かくれごせるもな	3音旋律 (第1種テトラコルド)	e音
	2	ジャンケンホイ	2音旋律 (a音とg音)	a音
	3	ジャンケンもって	2音旋律 (a音とg音)	a音
	4	ジャンケンポンよ	律の音階	
	5	お寺のお坊さんが	4音旋律	d音 g音
	6	いっぽてっぽ (一)	3音旋律 (第1種テトラコルド)	a音
	7	いっちこたいちこ	2音旋律 (a音とg音)	a音
	8	ひとりふたり	4音旋律	a音 e音
	9	つうつうたこの	3音旋律 (第1種テトラコルド)	e音
	10	ひいにふうに	2音旋律 a音とg音	a音
手まり歌	11	船の船頭さんに	民謡音階 プラガル旋法型, 2つの第1テトラコルドの disjunct	d音 g音
	12	一もんめの い助さん	律の音階 正格旋法型, 2つの第3テトラコルドの disjunct	d音 a音
	13	1つ人びと	律の音階 正格旋法型, 2つの第3テトラコルドの disjunct	d音 a音
	14	一つひよどりゃ (一)	4音旋律	a音
	15	いもにんじん	3音旋律 (長2度+長2度)	a音
	16	ひいふの三吉	3音旋律 (第1種テトラコルド)	a音 e音
	17	ひいふうみいよ	4音旋律	a音
	18	一番はじめが	呂音階	
	19	一かけ二かけて	2つの第3テトラコルドの conjunct	f音 c音
	20	いっちょこにんじん	2音旋律 (g音 a音)	a音
	21	おんしらしらしら	呂音階	
	22	いちにとらんらん	4音旋律	a音
	23	おねんじょ	3音旋律 (第1種テトラコルド)	a音
	24	つかもつかも	4音旋律	a音 e音
	25	手まると手まるが	呂音階	
	26	手まりと手まりが	4音旋律	a音
	27	ひいでふうで	呂音階	
	28	西や東の	律音階	

分類	No	曲名	旋律の種類	核音・ 終止音
手まり歌	29	向こう通るは	律音階	
	30	坊さん坊さん(一)	律音階	
	31	坊さん坊さん(二)	呂音階	
	32	あんたがたどこさ	4音旋律	a音 e音
	33	もうしもうし おやどっさん	民謡音階 プラガル旋法型, 2つの第1テトラコルドの disjunct	d音 g音
	34	山のちゃんちゃんぎす	3音旋律(第1種テトラコルド)	e音
	35	お菊さん待ちゃ待ちゃ	律の音階, 2つの第3テトラコルドの disjunct, 正格旋法型	d音 a音
	36	これのお背戸の	3音旋律(第1種テトラコルド)	e音
	37	金柑密柑	3音旋律(第1種テトラコルド)	g音
	38	向かいの婆さん	4音旋律	e音
	39	向こう通りやる	呂音階	
	40	れんげ女郎	4音旋律	g音
	41	ござれ友達	呂旋律	
	42	向かいの山へ	4音旋律	a音 e音
	43	山王お猿さま	4音旋律	e音
	44	向かいの米屋の	4音旋律	g音
	45	ちょうぐち出口の	呂旋律	
	46	ちゃんなるかくなる	民謡音階 プラガル旋法型, 2つの第1テトラコルドの disjunct	a音 e音
	47	ひでふでみでよで	3音旋律(長2度+長2度)	a音
48	とろふくとろふく	4音旋律	a音 e音	
49	とんとんたたくめ	4音旋律	a音 e音	

分類	No	曲名	旋律の種類	核音・終止音
羽根つき歌 お手玉歌	50	ひいやふうや	3音旋律（第1種テトラコルド） 第1種テトラコルド	a音 e音
	51	ひといきな	4音旋律	a音
	52	ひとりきな	呂の音階	
	53	一山超えて（一）	4音旋律	a音 e音
	54	ひやふやみやよ	4音旋律 短3度+長2度+短3度	g音 不安定
	55	いちごににんじん	3音旋律 第1種テトラコルド	e音
	56	じゃこかい	4音旋律	g音
	57	おこまさん	不明 はじめと終わり 3音旋律（第1種テトラコルド） 中間部 ペンタコルド 転調と考えられる 自然短音階に近い	g音
	58	向こう通る	不明 律の音階 中間部（4音旋律） 終わりの部分（不明の4音旋律） 転調と考えられる	g音 e音
	59	人が船に乗って	4音旋律	e音 a音
	60	どこではやるか	都節音階	a音
	61	おひとつおとして（一）	前半と後半 3音旋律 長2度+長2度 中間部 3音旋律 第1種テトラコルド	g音
	62	おひとつおとして（二）	都節音階	a音
	63	おひとつおひとつ	都節音階	a音

分類	No	曲名	旋律の種類	核音・ 終止音
手遊び歌	64	せっせっせ (一)	不明 b音がh音なら 都節音階	a音 e音
	65	せっせっせ (二)	律音階	a音
	66	一つひよこが	3音旋律 (第1種テトラコルド)	a音
	67	あおやまごしょさんが	律音階	g音
	68	一わとまれ	4音旋律	a音
	69	じゃんすけさん	4音旋律	a音
	70	あがり目さがり目	4音旋律	e音
	71	だるまさだるまさ	4音旋律	a音
	72	眉毛の殿様が	3音旋律 (第1種テトラコルド)	a音 e音
	73	おおやぶこやぶ	3音旋律 第1テトラコルド	a音 e音
	74	子供と子供	4音旋律	a音 e音
	75	一が刺した	3音旋律 長2度+長2度	a音
	76	一山超えて (二)	4音旋律	a音 e音
	77	三重の重箱に	3音旋律 長2度+長2度	a音
	78	一二と三	呂旋法	a音
	79	いっぼてっぼ (二)	4音旋律	a音 e音
	80	けむりけむり	2音旋律 長2度 g音 a音	a音
	81	ありの道ゃ	4音旋律	a音
	82	のりこんで	4音旋律	a音 e音
	83	一さ一さ	4音旋律	a音 e音
84	まるかいてチョン (一)	4音旋律	a音	
85	まるかいてチョン (二)	4音旋律	a音 e音	

分類	No	曲名	旋律の種類	各音・ 終止音
鬼遊び	86	かごめかごめ (一)	4音旋律	a音 e音
	87	かごめかごめ (二)	3音旋律 (第1種テトラコルド)	e音
	88	とんとんごめんなさい	4音旋律	e音
	89	となりのおばさん	4音旋律	d音 g音
	90	おにさんこちら	3音旋律 (第1種テトラコルド)	a音
	91	ようかくれ	3音旋律 (第1種テトラコルド)	a音
	92	じゅんじゅんかくし	3音旋律 (第1種テトラコルド)	a音
	93	じゅんじゅんかくし 九年母	4音旋律	a音 e音
縄跳び歌	94	大なみ小なみ	3音旋律 第1テトラコルド	g音
	95	たわらのねずみ	3音旋律 第3テトラコルド	a音
	96	おじょうさん (一)	4音旋律	a音 e音
	97	おじょうさん (二)	4音旋律	a音 e音
	98	郵便屋さん	3音旋律 第1テトラコルド	a音 e音
	99	天神様から	3音旋律 第1テトラコルド	a音 e音
	100	おはぎがお嫁に	長音階 不明	

分類	No	曲名	旋律の種類	各音・ 終止音
外遊び	101	出たか出たか	3音旋律 第1テトラコルド	d音
	102	子とろ子とろ	4音旋律	a音 e音
	103	子売ろ子売ろ	3音旋律 第1テトラコルド	a音 e音
	104	ひらいたひらいた	3音旋律 第1テトラコルド	a音 e音
	105	ここはどこの	4音旋律	f音 h音
	106	淀の川瀬の	2音旋律 長2度 g音 a音	a音
	107	なべなべ底抜け	3音旋律 第1テトラコルド	a音
	108	白ひけ茶ひけ	4音旋律	a音 e音
	109	山の婆山の婆(一)	3音旋律 第1テトラコルド	a音
	110	山の婆山の婆(二)	都節音階	a音 e音
	111	あいつら	3音旋律 第1テトラコルド	a音
	112	かまつくろ	3音旋律 第1テトラコルド	a音 e音
	113	てんてんてん車	4音旋律	a音 e音
	114	鯉の滝登り	4音旋律	e音
	115	ここは大海	3音旋律 第1テトラコルド	a音 e音
	116	しまいの晩方	4音旋律	a音 e音

分類	No	曲名	旋律の種類	各音・ 終止音
自然の歌	117	夕やけ こやけ	4音旋律	a音 e音
	118	日がさ 雨かさ	3音旋律 (第1テトラコルド)	e音
	119	子ども 風の子	4音旋律	a音 e音
	120	雪こんこんこ	呂音階	a音 e音
	121	お月さま いくつ	4音旋律	a音 e音
	122	天の川原の	4音旋律	a音 e音
動物植物の歌	123	つるつる鉤んなれ	3音旋律 (第1テトラコルド)	a音
	124	からすからす	4音旋律	a音 e音
	125	かいちぶろ	3音旋律 (第1テトラコルド)	e音
	126	ひとらの子供は	3音旋律 (第1テトラコルド)	e音
	127	ちんちろべんけい	3音旋律 (第1テトラコルド)	e音
	128	きいきいもんずが	3音旋律 (第1テトラコルド)	e音
	129	ひんかちゃひんでも	3音旋律 (第1テトラコルド)	e音
	130	ほうほうほたる来い (一)	4音旋律	a音 e音
	131	ほうほうほたる来い (二)	4音旋律	a音 e音
	132	ほうほうほたる来い (三)	4音旋律	a音 e音
	133	でんでんむし	3音旋律 (第1テトラコルド)	e音
	134	おとこなら山行け	3音旋律 (第1テトラコルド)	e音
	135	ちょうちょうば	3音旋律 第1テトラコルド	a音 e音
	136	西むけ長次郎	4音旋律	a音 e音
	137	そおとめそおとめ	3音旋律 (第1テトラコルド)	a音 e音
	138	わらびさわらびさ	3音旋律 (第1テトラコルド)	a音 e音
	139	たゆうさたゆうさ	3音旋律 (第1テトラコルド)	a音 e音
	140	梅干ゅ食べても	3音旋律 (第1テトラコルド)	a音 e音

分類	No	曲名	旋律の種類	各音・ 終止音
歳事歌	141	どんどん焼きゃ	3音旋律 第1テトラコルド	a音 e音
	142	なるかならんか	4音旋律	a音
	143	鬼ゃあそと	3音旋律 長2度+長2度	a音
	144	正月三日	3音旋律 第1テトラコルド	e音
	145	太郎兵衛が	3音旋律 第1テトラコルド	e音
	146	亥の子たのこ(一)	4音旋律	a音 e音
	147	おしゃかさま	3音旋律 第1テトラコルド	e音
	148	亥の子たのこ(二)	3音旋律 第1テトラコルド	e音
	149	亥の子亥の子	3音旋律 第1テトラコルド	e音
	150	亥の子の晩に	呂旋律	e音
	151	大黒さんという人は	呂旋律	a音
	152	いちぶにぶの木	3音旋律 第1テトラコルド	e音
	153	一つひよどりゃ(二)	3音旋律 第1テトラコルド	e音

分類	No	曲名	旋律の種類	各音・ 終止音
ことば遊び歌	154	一つひいた豆	4音旋律	a音
	155	うさぎうさぎ	4音旋律	a音 e音
	156	一つ冷や飯	4音旋律	a音
	157	そうだそうだ	3音旋律 (第1テトラコルド)	e音
	158	わしかたの	3音旋律 (第1テトラコルド)	e音
	159	みかんきんかん	2音旋律 長2度 g音 a音	a音
	160	小野の山王さん	4音旋律	e音
	161	京の三十三間堂にゃ	3音旋律 (第1テトラコルド)	e音
	162	高野の弘法大師が	3音旋律 (第1テトラコルド)	e音
	163	などなどああに	4音旋律	e音
	164	しいびりしいびり	4音旋律	e音
	165	お前の指や	3音旋律 第1テトラコルド	e音
	166	初わらびは食うな	3音旋律 第1テトラコルド	e音
	167	なにもかも	3音旋律 (第1テトラコルド)	e音
	168	にごり水は	2音旋律 長2度 g音 a音	a音
	169	生き生きとんぼ	2音旋律 長2度 g音 a音	a音
	170	もつれんな	2音旋律 長2度 h音 a音	a音
	171	福德世帯	2音旋律 短3度	e音
172	どちらがよいか	2音旋律 長2度 g音 a音	a音	
173	指きりかんきり	3音旋律 (第1テトラコルド)	g音 d音	

分類	No	曲名	旋律の種類	各音・ 終止音
ことば遊び歌	174	あんなねーま	3音旋律 第1テトラコルド	e音
	175	いま泣いた鳥が	3音旋律 第1テトラコルド	e音
	176	いろはに金平糖	呂旋律	e音
	177	上のもな	2音旋律 長2度 g音 a音	a音
	178	ええこときいた	4音旋律	e音
	179	拾うたもな	2音旋律 長2度 g音 a音	a音
	180	おしゃれしゃれても	4音旋律	a音
	181	男と女子と	3音旋律 第1テトラコルド	e音
	182	お泣きびいびら	4音旋律	a音
	183	女子まさの	4音旋律	e音
	184	ぬか歯の抜けた	4音旋律	e音 a音
	185	屁ひりぼ	3音旋律 第1テトラコルド	e音
	186	まねしんご	4音旋律	a音
	187	まんじゅう買うたら	3音旋律 第1テトラコルド	e音 a音
	188	ゆうたちゅうの	4音旋律	a音
	189	よういいだこ	4音旋律	a音
	190	鬼の来ん間に	4音旋律	a音
	191	坊主坊主山芋	3音旋律 第1テトラコルド	e音
192	さよなら三角	4音旋律	a音	

分類	No	曲名	旋律の種類	核音・終止音
子守唄	193	かおかおかおよ	3音旋律 第1テトラコルド	e音
	194	きっこうばい	2音旋律 長2度 g音 a音	a音
	195	ぎっこたんまっこたん	2音旋律 長2度 g音 a音	a音
	196	ちょちょちあばば	3音旋律 第1テトラコルド	e音
	197	この子はどこの子	4音旋律	a音
	198	大さむ小さむ	3音旋律 第1テトラコルド	a音 e音
	199	ねんねこよ	4音旋律	a音
	200	ねんねこよ (一)	不明	a音 d音
	201	ねんねこよ (二)	民謡音階	a音
	202	ねんねこよ (三)	4音旋律	a音
	203	ねんねん猫のけつに	都節音階	a音
	204	ねんねん小山の	4音旋律	a音 d音
	205	子供衆子供衆	4音旋律	a音
	206	けんけん山の	都節音階	a音
	207	婿をとるのは	4音旋律	a音
	208	お前は唐の	呂音階	a音 e音
	209	お月さんなんぼ	3音旋律 第1テトラコルド	a音 e音
	210	あとさまなんぼ	4音旋律	a音 e音
	211	あとほんなんぼ	4音旋律	a音 e音
	212	ねんねこほんそ	呂音階	a音
213	次郎や太郎や	3音旋律 第1テトラコルド	a音 e音	
214	ねんねん唱名	呂音階	a音	
215	どこへ行くとも	呂音階 (短音階)	a音	

4.2 小泉文夫の音階の基礎構造による山口のわらべ歌の分析の統計からみる特徴

表1の日本わらべ歌全集19下山口のわらべ歌の分析の結果を2音旋律、3音旋律、4音旋律、5度以上の音階等によるものと統計を取ってみると下記の表2となる。

表2の統計から山口のわらべ歌の全体を見ると3音旋律及び4音旋律がほとんどを占めている。5度以上の音域を持つわらべ歌には、中国の音律を基として雅楽の音階として用いた呂音階がある。またその呂音階にテトラコルドとなる4度を持たせて日本で改良してできた律音階もある。このことから、わらべ歌も日本の雅楽などの他の分野の音楽の影響も僅かにうけていることが解る。

表2 山口のわらべ歌全体の旋律の種類別の統計

	2音旋律	3音旋律	4音旋律	5度以上の音域 (音階等)	不明
数 (%)	17 (7.9%)	75 (34.8%)	79 (37.2%)	39 (18.1%)	5 (2.3%)

さらに12種類の分類別に2音旋律、3音旋律、4音旋律、5度以上の音階等に別に統計を取ってみると下記の表3わらべ歌の分類ごと旋律別の統計表となる。表3の統計を見ると、その特徴として、幼児の成長に合わせて旋律の音数が増えている。

エンゲ・メロディー^(注8)と言われる2音旋律は、「遊び初めの歌」「ことば遊び歌」が多く、「遊び初めの歌」は3音旋律、4音旋律と音が増えると次第に少なくなっている。体を動かすことが伴うわらべ歌「羽根つき歌」「お手玉歌」「鬼遊び歌」「縄跳び歌」は2音旋律で構成されているわらべ歌には無い。わずかに「手まり歌」と「手遊び歌」に1曲あるのみである。これは2音旋律で構成されているわらべ歌は、運動能力がまだ未発達な乳児期を対象に歌われるものが多く、動きを伴うわらべ歌は極端に少ないと考える。また「動物植物の歌」と「歳事歌」も2音旋律は含まれないがこれも幼児の感性や学習がまだしっかりと始まらない時期であり自然なことである。

3音旋律と4音旋律は、ほぼどの分類でも含まれている。「手まり歌」「羽根つき歌」「お手玉歌」「手遊び歌」「鬼遊び歌」「縄跳び歌」「外遊び歌」は運動能力が付き始める時期に合わせて音の数も増えたわらべ歌となっている。また「自然の歌」「祭事歌」「動物植物の歌」は環境と触れ合い、知識を獲得する成長時期と合わせるように3音旋律、4音旋律を中心に見られる。

「ことば遊び歌」と「子守唄」は2音旋律、3音旋律、4音旋律のどの旋律にも見られる。「ことば遊び歌」は年齢に合わせて獲得する言葉の種類が増える成長期と旋律の種類が適切な姿になっている。また「子守唄」は、子供の成長と生活に必要なとされる睡眠を助ける目的のため、どの年齢の時期にも見ることができる。

このわらべ歌の分類ごと旋律別の統計から、2音旋律は乳児期の子供を対象とし、3音旋律、4音旋律そして5度以上の音域を持つ音階で成立しているわらべ歌は、子供の成長に合わせて学習と運動そして社会性や風土また季節をわらべ歌に伴って教育する環境を有している。

表3 わらべ歌の分類ごと旋律別の統計

	2音旋律	3音旋律	4音旋律	5度以上の音域	不明
遊びのはじめ	4曲	3曲	2曲	1曲	
手まり歌	1曲	7曲	13曲	18曲	
羽根つき歌 お手玉歌	0曲	2曲	5曲	5曲	2曲
手遊び歌	1曲	5曲	12曲	3曲	1曲
鬼遊び歌	0曲	4曲	4曲	0曲	
縄跳び歌	0曲	4曲	2曲	1曲	
外遊び歌	1曲	8曲	6曲	1曲	
自然の歌	0曲	1曲	4曲	1曲	
動物植物の歌	0曲	13曲	5曲	0曲	
歳事歌	0曲	9曲	2曲	2曲	
ことば遊び歌	8曲	14曲	16曲	1曲	
子守唄	2曲	5曲	8曲	7曲	1曲

5. 小泉文夫の音楽教育論

5.1 江戸時代から戦後の音楽教育の推移の概要

江戸時代の音楽教育といえるものは、階級社会により音楽形式が異なっていた。貴族階級は雅楽を行い、武士階級は能を、町人階級は三味線を扱っていた。そして階級が無くなった明治時代になると従来の音楽を階級の垣根を越えて世の中に浸透させることは困難であった。その中、学校教育で音楽が扱われ、音楽取り調べの御用掛の伊沢修二が明治17年「西洋音楽と日本音楽には根本的な差はない。」と意見書を提出した。これに基づき学校音楽教育に西洋音楽が取り入れられた。⁽¹⁶⁾ 大正時代になると新教育運動の動きと相まって、「赤い鳥運動」が起こり児童のための音楽が鈴木三重吉の推進役により雑誌「赤い鳥」で発刊され、リトミック、律動遊戯が広く行われた。⁽¹⁷⁾ 戦後になると経済力の復興と歩調を合わせ、18、9世紀の西洋音楽を柱とする音楽教育に力を注いだ。そして西洋音楽は優れた音楽と認識され、日本音楽は、教育者にあっても軽視された。そして音楽の早期教育が日本の音楽的後進性を挽回する方法として効果的と考えられ、ソルフェージュを教育し、楽譜が読め、絶対音感で音が聞こえる耳を教育し育てようとした。⁽¹⁸⁾

5.2 わらべ歌を出発点とする音楽教育

民族音楽は、言語、身体運動、自然環境、歴史的風土、社会習慣と係わり、民族全体と密接な関係を含んでいる。一方西洋音楽を中心とする音楽教育は、音楽だけを取り出し、国家的に教育を行う。西洋音楽中心の音楽教育を受けていると、偏った音楽感受性を持ち、日本音楽の美しさを素直に受けることができなくなる。⁽¹⁹⁾

現在歌われているわらべ歌は、ほとんど江戸時代以降に歌われていたものである。それ以前の奈良・平安時代にもわらべ歌は歌われていたが、現在は当時歌われていたわらべ歌は失われている。しかし、わらべ歌は同じ歌であっても地域や年齢また時代によって変容させ、自分たちに合うように作り直している。わらべ歌は子ども自身の内に持っている感性を発露したものである。遊びを伴い、言葉も日本語のイントネーションに一致している。そして自由に即興的に表現できる場があり、唱歌のように決められた歌を歌うという義務的なものではない。⁽²⁰⁾ また、日本芸術音楽の歴史を見ると、奈良・平安時代の雅楽、室町時代の能楽、江戸時代の歌舞伎と時代とともに音楽も変容している。その時代の変容の間、わらべ歌は子どもを中心として、どの時代にも一定に存在して現在まで伝承するように生きている。この変容の様子から、新しいわらべ歌でも古い要素が残っていると考えられる。⁽²¹⁾

音楽と民族性を考えるために、赤ん坊の泣き声を比べると民族による違いの特性は見られない。そして5、6歳までの子供には民族性がはっきり見えず、どうにでも染まる時期である。この時期の間に民族性をかなり植え付けることができる。しかし、6歳以上になるとそれは難しくなる。このような子どもの成長の特性を踏まえて、小泉文夫はわらべ歌の教育論を唱えている。⁽²²⁾ また同様の主張に「わらべ歌教育運動」に直接影響を与えた音楽評論家園部三郎は「わらべ歌教育が占める位置は限定的であり、わらべ歌が有効であるのは幼児や低学年児童に限る」と「わらべ歌限界論」を主張する。⁽²³⁾

5.3 わらべ歌の教育方法

わらべ歌教育運動に先行した研究に村尾忠廣の「わらべ唄教材の退潮と二本立て方式」がある。二本立てとは、一つは歌唱の音組織を基に音程やリズムなどの技術を学ぶ教則本的な面。他の一つは歌唱そのものの歌唱活動を行う曲集的な面の二本立ての教育方法である。⁽²⁴⁾ この二本立て方式に

対して園部三郎もはじめは賛同した。そして、わらべ歌を教材として子どもたちの歌う喜びを刺激する教育方法と2音で構成される歌、3音で構成される歌、4音で構成される歌のリズムなどの音楽を構成する要素を考慮した体系的な教育方法を提案した。⁽²⁵⁾ つまりわらべ歌の音組織を使ったソルフェージュ教育とわらべ歌そのものを歌う歌唱教育を考え始めた。しかし後年、園部三郎は、この二本立ての教育方法が音楽活動を必要とする子供に、国語教育における文法の教授のようになってしまうことを懸念した。⁽²⁶⁾ 小泉文夫もわらべ歌をソルフェージュに転用したことに驚き、わらべ歌はソルフェージュの教材ではないと主張する。また二本立て方式を唱えた村尾忠廣も日常の環境で遊んでいるわらべ歌を教室へ持ち込み音楽教育を行っても、日常の環境以上のことを期待するのは無理である。と主張している。⁽²⁷⁾ 小泉文夫は、音楽教育の出発点は、子供たちが自発的に遊んだ「わらべ歌」から始める。そして外国のわらべ歌等を盛り込んで将来の音楽的視野の広がりを促す体制が重要で小学校3年生までをわらべ歌教育を行うべきと理念を示している。⁽²⁸⁾ そして、具体的な教育方法として、幼児期から1年生では、音階を中心に2音旋律と3音旋律を扱い、使用した音を使って発展させ日本音楽のペントニック^(注9)の音程感覚を身に付けさせることができる。ペントニックは世界のわらべ歌等の民俗音楽によくあらわれる音階組織であることで、外国のわらべ歌等に自然と親しむようになることがねらいである。2年以降はわらべ歌を声部ごとに掛け声を連続させ、4度和音や対位法を加える。3年の終わりが都節音階などの曲を取り上げてわらべ歌と混ぜていく。4年からは西洋音楽の和音と長短音階を教え、日本音楽と西洋音楽は根本的に違うことを気付かせ、この違いが分かることが将来人間の多面的な表現を音楽の中で求める基礎となる。小泉の初期音楽教育方法の提言はここで終わっている。小泉の教育方法はわらべ歌の研究に根拠を持ち説得力のある方法論であるがこれ以上踏み込まず多くの音楽教育者の教育現場の研究に託している。⁽²⁹⁾

5.4 小泉文夫の西洋音楽一辺倒の教育批判

小泉文夫は、著書「おたまじゃくし無用論」の中で音楽教育への批判と提言を行っている。戦後経済発展と歩調を合わせるように、音楽教育は西洋音楽を基本とする教育に力を注いだ。18、19世紀の西洋音楽は優れた音楽と認識され、日本の音楽は教育者も含んで見向きもされなくなった。そして西洋音楽は一般の人々に深く植え付けられた。また、音楽の早期教育は日本の音楽的後進性を挽回する効果的な方法と位置付けられた。その教育の方法はソルフェージュを音楽教育の基本として、楽譜が読めること、整った音感を身に付ける子どもを育てるという西洋音楽の教育方法であった。これにともなって、学校教育ではわらべ歌や民謡の教材は激減し、西洋音楽の長調や短調の音感覚を子供たちに植え付ける教育を行い、この音楽教育を全国的に行うために組織的に教育体系が組み立てられた。

その結果、普段子供たちが耳にして親しんでいるわらべ歌、土地の民謡、郷土芸能の音楽は、教科書には殆ど出てこなくなった。そして子どもたちにとって音楽と言うものは、暮らしとかけ離れたものになり、音楽の先生が黒板やピアノを使って教え、体験させられている教育環境となった。⁽³⁰⁾ そして小泉文夫は、「本来音楽は多くの種類があり、生活に応じた様々な価値がある。その多くの種類の音楽に優劣や良し悪し等を付けることは避けるべきである。」と主張する。また、西洋音楽中心の教育体系によって、長調と短調以外は音階とは認識できにくくなる。強弱で決まる西洋音楽のリズムが身につくと日本の音楽にはリズムを感じるようになる。西洋音楽中心の音楽教育を行うと偏った感覚が植え付けられる。そして安易な価値観と結びついた子供たちの中には、邦楽の音楽を聴いて笑ってしまうことが見られる。画一的な音楽教育には「子どもたちの日常的な遊びや表情を尊重する。」「住んでいる地域や社会との結びつきを考える。」という意識が欠けていると指摘している。⁽³¹⁾

6. おわりに

山口のわらべ歌を小泉文夫の音階の基礎構造を基に分析した。その結果を12の分類項目別に統計をとった。さらにその統計を子どもの成長時期に視点をおいて12の分類項目と音階の基礎構造を見る。そこから子供の成長と関連するようにわらべ歌の項目と音階の基礎構造が一致していることが判明する。つまり、付帯的要素を含んだわらべ歌は子どもの発達の段階に適する内容であり、そこに寄り添うように2音旋律の単純な構造から3音旋律、4音旋律などの音階の基礎構造も発展的に係わっている。そして、そのわらべ歌を構成している音階の基礎構造によって、日本音楽の感覚が植え付けられる。このような特徴・特質から「わらべ歌は、幼児における総合教育」になっている。音程やリズムを考慮して旋律を歌う指導ではなく、単に楽しくわらべ歌を歌うだけで、成長と用途や環境に応じた幼児教育を行っていることになる。

小泉文夫は、自身の音楽教育論の中で「5, 6歳までの子供には民族性がはっきり見えず、どうにでも染まる時期である。」と論じている。5, 6歳までの子どもには、民族性を獲得するために最も重要な時期であることは初期音楽教育にとっても同じことが言える。また同様の主張に「わらべ歌教育運動」に直接影響を与えた音楽評論家園部三郎は「わらべ歌教育が占める位置は限定的であり、わらべ歌が有効であるのは幼児や低学年児童に限る」と「わらべ歌限界論」を主張する。⁽²³⁾ 付帯的要素を含んだわらべ歌とそれを構成する音階の基礎構造は表裏一体の関係にあり、わらべ歌の教育的な要素が子どもの音楽教育を提言した小泉文夫の音楽教育論を導いている。

昔と比較にならない高度な現在社会においても、保育所、幼稚園、認定こども園などで、わらべ歌は重要な教育手段である。教育場面の展開や子供を注目させたいときにわらべ歌を使った手遊び歌を行うと、子供たちは関心を持って反応を示す場面はよく見られる。保育者はわらべ歌の教育的力ともいべき特徴を認識して、多くの場面でわらべ歌を歌う環境を作ることが重要である。小学校低学年の音楽の教科書にも、わらべ歌は盛り込まれている。この時期はいかに多くの機会にわらべ歌を歌う場面を作る工夫をすることが大切である。わらべ歌を歌うことが日本人の民俗性を持ち始めた児童にとって、小泉文夫が提言する音楽的なすそ野の広がりにつながる音楽教育となる。小泉文夫の音階の基礎構造から明らかになったわらべ歌や伝統音楽の構造や特徴から新しい音楽教育法が生まれることに注目をし、さらに理解を深めることを課題としたい。

参考文献

- (1) 小泉文夫(1984a) おたまじゃくし無用論 ほるぷ出版 119頁。
- (2) (1994a) ニューグローヴ世界音楽事典 講談社 6巻 416頁。
- (3) 小泉文夫(1960a) 日本伝統音楽の研究 音楽之友社 107 108頁。
- (4) 小泉文夫(1960b) 109頁。
- (5) 小泉文夫(1960c) 109～112頁。
- (6) 小泉文夫(1960d) 112～114頁。
- (7) 小泉文夫(1960e) 115～116頁。
- (8) 小泉文夫(1960f) 129～134頁。
- (9) 小泉文夫(1960g) 165～170頁。
- (10) 小泉文夫(1960h) 170頁。
- (11) 金澤正剛(1998) 中世音楽の精神史講談社 54～55頁。
- (12) 小泉文夫(1960i) 248頁。

- (13) (1994b) 12巻 245～246頁。
- (14) (1994b) 12巻 208頁。
- (15) 小泉文夫(1960a) 43～44頁。
- (16) 小泉文夫(1984b) 36頁。
- (17) 戸江茂博(2019) 幼児教育方法論 学文社。
- (18) 小泉文夫(1984c) 37頁。
- (19) 大西友信(1997a) 再考：小泉文夫の音楽教育論—わらべ歌を出発点とする音楽教育—
愛知教育大学研究報告, 46(教育科学編) 150頁。
- (20) 大西友信(1997b) 152頁。
- (21) 小泉文夫(1960j) 108頁。
- (22) 小泉文夫(1984d) 129頁。
- (23) 園部三郎(1975a) 下手でもいい音楽の好きな子どもを 音楽の友社 112頁。
- (24) 村尾忠廣(1978a) わらべ歌教材の退潮と二本立て方式ⅠⅡⅢ 季刊音楽研究夏
音楽之友社 76頁。
- (25) 園田三郎・山住正己(1962) 日本の子どもの歌 岩波新書 204-205頁。
- (26) 園部三郎(1975b) 音楽の友社 112頁。
- (27) 村尾忠廣(1978b) 76頁。
- (28) 西谷紀久子(2017a) 小泉文夫の音楽教育論から学ぶもの「わらべ歌から始まる音楽教育」
に着目して 東北女子大学・東北女子短期大学 紀要 No. 56 210頁。
- (29) 西谷紀久子(2017b) 210～211頁。
- (30) 小泉文夫(1984e) 36～42頁。
- (31) 小泉文夫(1984f) 43, 48頁。

〔注〕

(1) 歌詞1つ文字に複数の音符が割り当てている形。

(2) 民謡音階 

(3) 都節音階 

(4) 律の音階 

(5) 琉球の音階 

- (6) 春秋の祭りで土地の男女が集まり歌い踊り交友をする求愛の場。
- (7) 予言の歌。
- (8) 音域の狭い音階を意味する。小泉は2音旋律を指している。
- (9) 5音音階。

Initial music education judging from analysis and a classification of the nursery rhyme of Yamaguchi by the underwork of the scale of Fumio Koizumi

Summary

Until today, as for the nursery rhyme study, many studies are carried out in an educational viewpoint flourishingly since postwar education began. In the tide, it is “all 39 Japanese nursery rhyme complete works 27 volumes” that it was issued. The Japanese nursery rhyme complete works concentrated the cooperation of the nursery rhyme researcher about more than 50 name of each places of the whole country and, about tradition nursery rhyme from the Meiji era to the Showa first half year, they mainly recorded the lyrics, the music scrupulously according to the metropolis and districts from Hokkaido to Okinawa and referred a commentary about race tradition and how to play. Noburu Uchida, Kuniko Kawakita joint work “nursery rhyme Japanese nursery rhyme 19 bottom of Yamaguchi” were issued on (Uchida, Hebei “nursery rhyme Japan nursery rhyme 19 bottom of Yamaguchi” 1992a p2) and November 25, 1992.

It is each book which showed results of research of Fumio Koizumi that caused big undulation for a study of the nursery rhyme. Above all, “study of the Japanese traditional music” published in 1958 (Ongaku no tomo sha corp.) clarified a Japanese folk song and a scale underwork of the nursery rhyme. As a result, I analyzed nursery rhyme according to the kinds of the scale and was able to classify it. And I will discover what there is a spontaneous law there, and is followed closely.⁽¹⁾ Furthermore, pointed out a problem of the music education of the European music complete devotion of Japan by a book “ladle useless idea” of Fumio Koizumi, and proposed importance to use the children’s song which was Japanese tradition music for initial music education. As a result, I will strengthen a problem to music education of an admiration posture and the nursery rhyme to the traditional music of the spot teacher. I analyzed nursery rhyme of Yamaguchi and classified these studies according to the theory of the underwork of the scale of the Japanese traditional music by Fumio Koizumi (and Kikuko Nishitani “pays her attention to music education to begin with the thing children’s song to learn from music theory of Fumio Koizumi” Tohoku Women’s College, Tohoku Women’s Junior College bulletin 2017a p209). I inspect the grounds of the education theory of Fumio Koizumi who focused on nursery rhyme having an incidental element from the result and examine that nursery rhyme is the most important to initial music education in the infancy.

Keyword

Fumio Koizumi, nursery rhyme, 2 sound melody, 3 sound melody, 4 sound melody, imperial court music scale, scale of the imperial court music, TetraCordes, pentaCordes, Saburo Sonobe